

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝志怪における廟神の前身と誕生
Author(s)	先坊, 幸子
Citation	中國中世文學研究 , 63-64 : 92 - 107
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051452">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051452</a>
Right	
Relation	



# 六朝志怪における廟神の前身と誕生

先坊 幸子

六朝志怪に見られる祠廟の多くは、国家公認のものでなく、民間の「淫祠」と呼ばれたものである。後漢末から魏・晋の乱世に生きた人々が、心の拠り所として「廟神」(神)を求め、それを祀る為に建てられたものと考えられるが、そこに祀られる「廟神」は、民衆道教(ここでいう民衆道教は宋以前の五斗米道や太平道などの民間信仰を総称したもの)に基づく神であり、それを祀る祠廟が後漢末から魏・晋にかけて各地に多数建てられ、政治を行う上で問題視される程であった。

例えば次に挙げる『三國志』魏書・武帝紀とその注には、多くの祠廟が建てられたものの、政治を行う上で悪影響を及ぼす恐れがあると見なされ、壊されてしまったという記述がある。

光和末、黄巾起。拜騎都尉、討潁川賊。遷爲濟南相。國有十餘縣、長吏多阿附貴戚、賊汚狼藉。於是奏免其八、禁斷淫祀。姦宄逃竄、郡界肅然。久之、徵還爲東郡太守、不就、稱疾歸鄉里。

魏書曰、長吏受取貪饜、依倚貴勢、歷前相不見舉。

聞太祖至、咸皆舉免、小大震怖、姦宄遁逃、竄入他郡。政教大行、一郡清平。初城陽景王劉章、以有功於漢、故其國爲立祠。青州諸郡、轉相倣效、濟南尤盛、至六百餘祠。賈人或假二千石輿服導從、作倡樂。奢侈日甚、民坐貧窮、歷世長吏、無敢禁絕者。太祖到、皆毀壞祠屋、止絕官吏民不得祀。及至秉政、遂除姦邪鬼神之事。世之淫祀、由此遂絕。

光和の末、黄巾起こる。騎都に拜せられ、潁川の賊を討つ。遷りて濟南の相と爲る。國に十餘縣有り、長吏多く貴戚に阿附し、賊汚狼藉たり。是に於て奏して其の八を免じ、淫祀を禁斷す。姦宄逃竄し、郡界肅然たり。之を久しくして、徵され還りて東郡太守と爲るも、就かず、疾と稱して郷里に歸る。

魏書曰く、長吏受取貪饜し、貴勢に依倚するも、歴前の相舉ぐるを見ず。太祖至り、咸皆舉げて免ずるを聞き、小大震怖し、姦宄遁逃し、竄れて他郡に入る。政教大に行はれ、一郡清平なり。初め城陽景王の劉章、漢に功有るを以て、故に其

の國爲に祠を立つ。青州諸郡、轉た相ひ倣效し、濟南尤も盛んにして、六百餘祠に至る。賈人或いは二千石の輿服導從を假り、倡樂を作す。奢侈日に甚だしく、民貧窮に坐すも、歴世の長吏、敢へて禁絶する者無し。太祖到り、皆祠屋を毀壞し、官吏・民に止絶して祠祀するを得ざらしむ。及びて政を秉るに至り、遂に姦邪・鬼神の事を除く。世の淫祀、此れに由りて遂に絶ゆ。

少し早い時期のものではあるが、この時代にどれほど多くの祠廟が建てられたのかを垣間見ることのできる資料と言える。

この「廟神」について記されている六朝志怪の例として、次に「葛祚の碑」〔『搜神記』巻十二〕を挙げておく。

吳時、葛祚爲衡陽太守。郡境有大槎横水、能爲妖怪。百姓爲立廟。行旅禱祀、槎乃沈沒。不者、槎浮。則船爲之破壞。祚將去官、乃大具斧斤、將去民累。明日當至。其夜、聞江中洶洶有人聲。往視之、槎乃移去、沿流下數里、駐灣中。自此行者無復沈覆之患。衡陽人爲祚立碑、曰「正德祈禳、神木爲移。」

吳の時、葛祚は衡陽太守と爲る。郡境に大槎有りて水に横たはり、能く妖怪を爲す。百姓、爲に廟を立つ。行旅、禱祀すれば、槎は乃ち沈沒す。不者、槎は、

槎浮く。則ち船之が爲に破壊せらる。祚將に官を去らんとするに、乃ち大いに斧斤を具へ、將に民の累ひを去らんとす。明日當に至るべし。其の夜、江中に洶洶として人聲の有るを聞く。往きて之を視るに、槎乃ち移り去り、流れに沿ひて下ること數里、灣中に駐まる。此れより行く者に復た沈覆の患ひ無し。衡陽の人祚の爲に碑を立てて、曰く「正德祈禳し、神木爲に移る」と。

この話の内容は、「葛祚という人が衡陽太守になった時、郡の境で大きなかだが川に浮かび、怪異を起こしたので、人々が廟を立てて祀った。旅人がこの廟で祈願すると、いかだは水中に沈み、祈願しなければ、いかだが浮き上がって船が壊されてしまう」というものである。

この度は、「廟神」とは元々は一体何者であったのか。また、どのようにして神とされたのか。そうしてそれらの神々は、当時の中国の人々にとつてどのような存在であったのか。それらの点について、六朝期の志怪資料を使つて考える。なお、廟に祀られた記述が無くとも、人々に「神」とされていたものは同様に扱ふこととする。

### 一 六朝志怪に於ける廟神の種類

志怪に登場する廟神は、その前身が何であつたのかという観点から「人が神となつたもの」、「その他」と分類できる。廟神の正体について記されていないものにつ

いては、今回は扱わない。

### ①「人間」

まず「人間」が神となつた説話の例として、「蔣山祠  
(二)」「搜神記」巻五)を取り上げる。

蔣子文者、廣陵人也。嗜酒好色、挑撻無度。常自謂  
「己骨清、死當爲神。」漢末爲秣陵尉、逐賊至鍾山  
下。賊擊傷額、因解綬縛之、有頃遂死。及吳先主之  
初、其故吏見文于道、乘白馬、執白羽、侍從如平生。  
見者驚走。文追之、謂曰「我當爲此土地神、以福爾  
下民。爾可宣告百姓、爲我立祠。不爾、將有大咎。」  
是歲夏、大疫、百姓竊相恐動、頗有竊祠之者矣。文  
又下巫祝「吾將大啓祐孫氏、宜爲我立祠。不爾、將  
使蟲入人耳爲災。」俄而小蟲如塵虻、入耳皆死、醫  
不能治。百姓愈恐。孫主末之信也。又下巫祝「若不  
祀我、將又以大火爲災。」是歲、火災大發、一日數  
十處。火及公宮。議者以爲「鬼有所歸、乃不爲厲。  
宜有以撫之。」於是使使者封子文爲中都侯、次弟子  
緒爲長水校尉、皆加印綬。爲立廟堂、轉號鍾山爲蔣  
山。今建康東北蔣山是也。自是災厲止息、百姓遂大  
事之。

蔣子文は、廣陵の人なり。酒を嗜み色を好み、  
挑撻度無し。常に自ら謂ふ「己の骨清ければ、  
死して當に神と爲るべし」と。漢の末に秣陵の尉

と爲り、賊を逐ひて鍾山の下に至る。賊は撃ちて  
額を傷つけ、因りて綬を解きて之を縛り、頃く有  
りて遂に死す。吳の先主の初めに及び、其の故吏  
道に於て文を見るに、白馬に乗り、白羽を執り、  
侍從平生の如し。見る者驚き走ぐ。文は之を追  
ひ、謂ひて曰く「我當に此の土地神と爲り、以て爾  
ら下民に福あらしむべし。爾、百姓に宣告し、我  
が爲に祠を立つべし。爾らずんば、將に大いなる咎  
有らんとす」と。是の歳の夏、大いに疫ありて、百姓  
竊かに相ひ恐動し、頗る竊かに之を祠る者有り。  
文は又た巫祝に下り「吾將に大いに孫氏を啓祐  
せんとすれば、宜しく我が爲に祠を立つべし。爾  
らずんば、將に蟲をして人の耳に入り、災を爲さ  
しめんとす」と。俄にして小蟲の塵虻の如きあ  
り、耳に入りて皆な死し、醫するも治する能はず。  
百姓愈よ恐る。孫主末之を信ぜざるなり。又  
た巫祝に下り「若し我を祀らずんば、將に又た大  
火を以て災を爲さんとす」と。是の歳、火災大い  
に發り、一日に數十處なり。火公宮に及ぶ。議す  
る者以爲へらく「鬼は歸する所有れば、乃ち厲を  
爲さず。宜しく以て之を撫すること有るべし」と。是  
に於て使者をして子文を封じて中都侯と爲し、次  
弟の子緒をして長水校尉と爲し、皆な印綬を加へ  
しむ。爲に廟堂を立て、轉じて鍾山を號して蔣山  
と爲す。今建康の東北の蔣山は是れなり。是れ

より災厲さいれいは止息しそくし、百姓ひやくせい遂すなはに大いに之つかに事ことふ。

この話の内容は、「蒋子文は常に『私の骨は清らかだから、死んだら神になるに違いない』と言っており、死んだ後に『私はこの土地の神となったから、お前たち民に幸福を与えてやろう。お前は人々に告げて、私の為に祠を立てよ。さもないと、大変な禍を起こしてやるぞ』と脅して廟を建てさせた」というものである。

## ②—A 「動物」

次に、「その他」の「動物」の例として、「高山君」〔『搜神記』卷十八〕を挙げる。

漢、齊人梁文、好道。其家有神祠、建室三四間、座上施皂帳、常在其中。積十數年。後因祀事、帳中忽有人語、自呼「高山君」。大能飲食、治病有驗。文奉事甚肅。積數年、得進其帳中。神醉、文乃乞得奉見顏色。謂文曰「授手來。」文納手、得持其頤、髯鬚甚長。文漸繞手、卒然引之、而聞作羊聲。座中驚起、助文引之、乃袁公路家羊也。失之七八年、不知所在。殺之、乃絕。

漢、齊せいの人 梁文りやうぶん、道を好む。其の家に神祠しんし有り、室の三四間りやうかんなるを建て、座上に皂帳さうちやうを施し、常に其の中に在り。積むこと十數年。後、祀事しじに因りて、

帳中ちやうちゆう、忽たちまち人語有り、自ら「高山君」と呼ぶ。

大いに能く飲食たじし、病を治むるに驗しるし有り。文奉事すること甚だ肅はげめり。數年を積み、其の帳中に進むを得たり。神醉しんすいひ、文乃ち顔色を奉見するを得んことを乞ふ。文に謂ひて曰く「手を授け來れ」と。文手を納め、其の頤あごを持つを得たるに、髯鬚ぜんしゆ甚だ長し。文漸やうぜんく手を繞め、卒然そつぜんとして之を引くに、而して羊の聲こゑを作すを聞く。座中驚起し、文を助けて之を引くに、乃ち袁公路の家の羊なり。之を失ふこと七・八年、所在しよざいを知らず。之を殺すに、乃ち絶ゆ。

この話の内容は、「梁文という人の家に祠があり、あるとき帳の中から人の声が聞こえ、『高山君』と名乗った。供物をよく飲み食いしたが、病気を治す力があつた。梁文はたいへん真面目に奉仕した」というものである。しかし、最終的には、神の正体が羊と知れて殺されてしまふ。

## ②—B 「植物（樹木）」

「植物」の例として、「樹神黃祖」〔『搜神記』卷十八〕を挙げる。

廬江龍舒縣陵亭、流水邊有一大樹。高數十丈、常有黃鳥數千枚、巢其上。時久旱、長老共相謂曰「彼樹

常有黄氣。或有神靈。可以祈雨。」因以酒脯往。亭中有寡婦李憲者、夜起、室中忽見一婦人。著繡衣、自稱曰「我樹神黄祖也。能興雲雨。以汝性潔、佐汝爲巫。朝來、父老皆欲祈雨。吾已求之於帝、明日、日中大雨。」至期果雨。遂爲立祠。神謂憲曰「諸卿在此。吾居近水、當致少鯉魚。」言訖、有鯉魚數十頭、飛集堂下。坐者莫不驚悚。如此歲餘。神曰「將有大兵、今辭汝去。」留一玉環、曰「持此可以避難。」後劉表、袁術相攻、龍舒之民皆徙去、唯憲里不被兵。

廬江龍舒縣の陵亭、流水の邊りに一大樹有り。高さ數十丈、常に黄鳥數千枚有り、其の上に巢ふ。時に久しく旱り、長老共に相ひ謂ひて曰く「彼の樹常に黄氣有り。或いは神靈有らん。以て雨を祈るべし」と。因りて酒脯を以て往かん。亭中に寡婦の李憲なる者有り、夜起き、室中に忽ち一人を見る。繡衣を著、自ら稱して曰く「我は樹神黄祖なり。能く雲雨を興す。汝の性潔らかなるを以て、汝を佐けて巫と爲さん。朝來、父老皆な雨を祈らんと欲す、吾已之を帝に求むれば、明日、日中すれば大いに雨らん」と。期に至りて果たして雨る。遂に爲に祠を立つ。神は憲に謂ひて曰く「諸卿此に在り。吾が居水に近ければ、當に少鯉魚を致すべし」と。言ひ訖りて、鯉魚數十頭有り、堂下に飛集す。坐する者驚悚せざる莫し。此

くの如きこと歳餘。神曰く「將に大兵有らんとすれば、今汝に辭して去らん」と。一玉環を留め、曰く「此れを持すれば以て難を避くべし」と。後に劉表、袁術相ひ攻め、龍舒の民皆な徙り去るも、唯だ憲の里のみ兵を被らず。

この話の内容は、「ある夜、李憲という婦人の前に神があらわれ『私は樹神の黄祖である。雲や雨を起こす能力がある。お前の性質は清らかであるので、お前を巫女にする云々』と告げた。翌日になって本当に雨が降つたので、祠を建てて祀つた」というものである。

## ②—C「石」

次に、その他の例として、「石侯祠」(太平御覽)五一引『列異傳』を挙げる。

豫寧女子戴氏、久病。出見小石曰「爾有神、能差我疾者、當事汝。」夜夢人告之「吾將祐汝。」後漸差、遂爲立祠、名石侯祠。

豫寧の女子戴氏、久しく病む。出でて小石を見て曰く「爾有神有りて、能く我が疾を差せば、當に汝に事ふべし」と。夜夢に人ありて之に告ぐ「吾將に汝を祐けん」と。後漸く差え、遂に爲に祠を立て、石侯祠と名づく。

この話は、「豫寧の戴氏という娘が小さな石に病気の平癒を願ったところ、夢に神があらわれて『わしがお前を助けてやろう』と言った。暫くして病気が治っていったので、祠をたててこれを祀った」というものである。

## 二 廟神誕生の経緯

以上のような廟神は、どのようにして神となったのであろうか。まずは①の「人間」が神となったものについて取り上げるが、志怪における廟神は、前身が人であるものが多くを占めている。そこで、どういう経緯を経たかという観点から五つに分けた。

1、死後に神となることを予言し、靈異を起こした人物を祀る。

1の例として、「劉玘」(『搜神記』巻四)を挙げる。

漢陽羨長劉玘、嘗言「我死當爲神。」一夕飲醉、無病而卒。風雨失其柩。夜聞荊山、有數千人喊聲。鄉民往視之、則棺已成冢。遂改爲君山。因立祠祀之。

漢の陽羨の長劉玘、嘗に言ふ「我死すれば當に神と爲るべし」と。一夕飲醉し、病無くして卒す。風雨ありて其の柩を失ふ。夜荊山に、數千人の喊聲有るを聞く。郷民往きて之を視れば、則ち棺已に

冢を成す。遂に改めて君山と爲す。因りて祠を立てて之を祀る。

この話は「後漢の陽羨県の長であった劉玘は、常に『私は死後に神となるであろう』と言っており、実際に靈異が起こつたので、人々は劉玘を祀った」という内容である。先に挙げた「蔣山祠(一)」は、この分類であるが、加えて、「骨が清らかである」ことが神となる条件として記されている。

2、亡くなった人の遺徳、節義、武勇などを偲んで祀る。

2の例として、「望陵祠」(任昉『述異記』巻上)を挙げる。

會稽山有虞舜巡狩臺、臺下有望陵祠。帝舜南巡、葬於九疑、民思之、立祠曰「望陵祠」。

會稽山に虞舜の巡狩臺有り、臺下に望陵祠有り。帝舜南巡し、九疑に葬らる。民之を思ひ、祠を立てて「望陵祠」と曰ふ。

この話は「舜が南巡して九疑山で亡くなったので、人々は舜の遺徳を偲んで祠を立て、望陵祠と呼んだ」という内容である。これは遺徳によって祀られたものである。また、「義陽神」(任昉『述異記』巻下)を取り上げる。

晋末、羣盜蜂起。義陽公主、自洛中出奔、至洛南。

士卒二千餘人、留守不去、以衛京都。劉曜攻破之。主有殊色、曜將逼之。主手刃曜不中、遂自刃。曜奇其正節、遺葬之、立義陽公主。鄰民憐之爲立廟。今義陽神是也。

晉の末、羣盜蜂起す。義陽公主、浴中より出奔し、洛南に至る。士卒二千餘人、留守して去らず、以て京都を衛る。劉曜攻めて之を破る。主に殊色有り、曜將に之に逼らんとす。主、手刃を命じんとするも中らず、遂に自刃す。曜、其の正節を奇とし、之を葬らしめ、義陽公主を立つ。鄰民、之を憐れみて爲に廟を立つ。今の義陽神は是れなり。

この話の内容は、「晋末、劉曜の侵略に抗して自殺した義陽公主を憐れんで、廟を立てて祀った」というものである。節義によつて祀られた廟神の例である。

もう一つ、「竹王神」(『異苑』卷五・任昉『述異記』卷下)を挙げておく。

漢武帝時、夜郎竹王神者、名興。初、有女子浣於豚水、見三節大竹。流入足間、推之不去。聞其中有號聲、持破之、得一男兒。及長有才武、遂雄夷獠氏。自立爲夜郎侯、以竹爲姓。所破之竹、棄之於野、即生成林。王嘗從人止石上、命作羹、從者曰「無水。」王以劍擊石、泉便湧出。今竹王水及破竹成林並存。

後漢使唐蒙開牂牁郡、斬竹王首。夷獠咸訴、以竹王非血氣所生、甚重之、求爲立後。太守吳霸以聞、帝封三子爲侯。死配食父廟。今夜郎縣有竹王三郎祠、是其神也。

漢の武帝の時、夜郎に竹王神なる者あり、名は興。初め、女子有りて豚水に浣ひ、三節の大竹を見たり。足間に流入し、之を推すも去らず。其の中に號聲有るを聞き、持して之を破るに、一男兒を得たり。長ずるに及びて才武有り、遂に夷獠氏に雄たり。自ら立ちて夜郎侯と爲り、竹を以て姓と爲す。破る所の竹あり、之を野に棄つるに、即ち生じて林と成る。王嘗て人に從ひて石上に止まり、命じて羹を作らしむ。從者曰く「水無し」と。王、劍を以て石を撃つに、泉便ち湧き出づ。今竹王水及び破竹成林並び存す。後に漢唐蒙をして牂牁郡を開き、竹王の首を斬らしむ。夷獠咸な訴へ、竹王の血氣より生ずる所に非ざるを以て、甚だ之を重んじ、爲に後を立てんことを求む。太守吳霸、以聞し、帝三子を封じて侯と爲す。死して父の廟に配食さる。今夜郎縣に竹王三郎の祠有るは、是れ其の神なり。

この話の内容は、「夜郎侯は漢の時の西南夷の酋長で、後に漢によつて征伐されたが、竹から生まれた存在であるとともに、生前に種々の靈異を示していたので、土地



の人々は神として祀った」というものである。これは武勇また靈異によつて祀られた神である。

### 3、非業の死を遂げた人物を祀る。

3の例として、「丁姑廟」(『搜神記』巻五)を挙げる。

淮南全椒縣有丁新婦者、本丹陽丁氏女。年十六、適全椒謝家。其姑嚴酷、使役有程、不如限者、仍便笞極不可堪。九月九日、乃自經死。遂有靈響、聞於民間。發言于巫祝曰、「念人家婦女、作息不倦、使避九月九日、勿用作事。」見形、著縹衣、戴青蓋、從一婢。至牛渚津、求渡。有兩男子、共乘船捕魚。仍呼「求載。兩男子笑、共調弄之。言「聽我爲婦、當相渡也。」」丁嫗曰、「謂汝是佳人、而無所知。汝是人、當使汝入泥死。是鬼、使汝入水。」便却入草中。須臾、有一老翁乘船載葦、嫗從索渡。翁曰、「船上無裝、豈可露渡。恐不中載耳。」嫗言「無苦。」翁因出葦半許、安處著船中、徑渡之至南岸。臨去、語翁曰「吾是鬼神、非人也。自能得過。然宜使民間粗相聞知。翁之厚意、出葦相渡、深有慚感、當有以相謝者。若翁速還去、必有所見。亦當有所得也。」翁曰「恐燥濕不至、何敢蒙謝。」翁還西岸、見兩男子覆水中。進前數里、有魚千數、跳躍水邊。風吹至岸上。翁遂棄葦、載魚以歸。於是丁嫗遂還丹陽。江南人皆呼爲丁姑。九月九日、不用作事、咸以爲息日也。今

所在祠之。

淮南の全椒縣に丁新婦なる者有り、本と丹陽の丁氏の女なり。年十六にして、全椒の謝家に適ぐ。其の姑嚴酷にして、使役するに程有り、限の如くせざれば、仍りて便ち笞捶ちて堪ふべからず。九月九日、乃ち自ら經死す。遂に靈響有りて、民間に聞こゆ。言を巫祝に發して曰く、「人家の婦女を念ふに、息を作して倦まざれば、九月九日を避けて、用ひて事を作すこと勿らしめよ」と。形を見すに、縹衣を著け、青蓋を戴き、一婢を從ふ。牛渚の津に至り、渡るを求む。兩男子有り、共に船に乗りて魚を捕らふ。仍りて呼びて載せんことを求む。兩男子は笑ひ、共に之を調弄す。言ふ「我が婦と爲るを聽さば、當に相ひ渡すべきなり」と。丁嫗曰く「汝是れ佳き人と謂ふも、知る所無し。汝は是れ人ならば、當に汝をして泥に入りて死せしむべし。是れ鬼ならば、汝をして水に入らしめん」と。便ち草中に却入す。

須臾にして、一老翁の船に乗りて葦を載する有れば、嫗は從りて渡さんことを索む。翁曰く「船上に裝無く、豈に露に渡すべけんや。恐らくは載するに中らざるのみ」と。嫗言ふ「若しきこと無し」と。翁は因りて葦を出すこと半ば許り、安處して船中に著け、徑ちに之を渡して南岸に至る。去るに臨み、翁

に語りて曰く「吾は是れ鬼神にして、人に非ざるなり。自ら能く過ぐるを得たり。然れども宜しく民間をして粗や相ひ聞知せしむべし。翁が厚意、葦を出して相ひ渡せば、深く慚ぢ感ずる有りて、當に以て相ひ謝する者有るべし。若し翁速やかに還り去れば、必ず見る所有らん。亦た當に得る所有るべきなり」と。翁曰く「恐らくは燥濕至らず、何ぞ敢へて謝を蒙らん」と。翁西岸に還るや、兩男子の水中に覆するを見る。進前むこと數里、魚有ること千數、水邊に跳躍す。風吹きて岸上に至る。翁は遂に葦を棄て、魚を載せて以て歸る。是に於て丁姬遂に丹陽に還る。江南の人皆な呼びて丁姑と爲す。九月九日、用て事を作さず、威な以て息日と爲すなり。今所在に之を祠る。

この話の内容は「丁新婦は姑が厳しく、鞭打たれるのに堪えかねて九月九日に自殺したが、同じような境遇の女性を助けるため神となり、九月九日を休息日とするようにさせ、人々に祀られた」というものである。

もう一つ、3の例として「梅姑廟」(『異苑』巻五)を挙げておく。

秦時、丹陽縣湖側有梅姑廟。姑生時有道術、能著履行水上。後負道法、增怒殺之。投屍于水、乃隨流波、漂至今廟處鈴下。巫人當令殯殮、不須墳瘞。即時有

が頭漆棺在祠堂下。晦朔之日、時見水霧中、曖然有著履形。廟左右不得取魚射獵、輒有迷徑、沒溺之患。巫云「姑既傷死。所以惡見殘殺也。」

秦の時、丹陽縣の湖の側に梅姑廟有り。姑は生時道術有り、能く履を著けて水上を行く。後に道法に負き、増怒りて之を殺す。屍を水に投ずるに、乃ち流波に隨ひ、漂ひて今の廟處の鈴下に至る。巫人殯殮せしむるに當たり、墳瘞を須む。即時、方頭の漆棺有りて祠堂の下に在り。晦朔の日、時に水霧中に、曖然として履を著くるの形有るを見る。廟の左右、魚を取りて射獵するを得ずして、輒ち徑に迷ひ、沒溺するの患有り。巫云ふ「姑既に傷死す。殘殺さるるを惡む所以なり」と。

この話の内容は「道法に背いたために夫に殺され、廟神となった」というものである。「丁姑」「梅姑」ともに不幸な死を迎えた人間を前身とする廟神であるという。

4、仙界に入つて神仙となった人物を祀る。

4の例として、「子英廟」(任昉『述異記』巻下)を挙げる。

江陰北有子英廟。子英即野人也。善入水捕魚。得一赤鯉、將著家池中養之。後長徑一丈、有角翅、謂子英曰「我迎汝身。汝上我背。」遂昇於天爲神仙。晉

時人。

江陰の北に子英廟有り。子英は即ち野人なり。善く水に入りて魚を捕る。一の赤鯉を得、將て家の池中に著けて之を養ふ。後長じて徑は一丈、角翅有り、子英に謂ひて曰く「我、汝の身を迎ふ。汝、我が背に上れ」と。遂に天に昇りて神仙と爲る。晉の時の人なり。

この話の廟に祀られている「子英」は、鯉に乗つて昇天し、神仙となつた。

## 5、その他

5の例として、「清溪廟神」〔『搜神後記』卷五〕を挙げる。

晉太康中、謝家沙門竺曇遂。年二十餘、白晢端正。流俗沙門、長行、經清溪廟前過、因入廟中看。暮歸、夢一婦人來、語云、「君當來作我廟中神。不復久。」曇遂夢問「婦人是誰。」婦人云「我是清溪廟中姑。」如此一月許、便病。臨死、謂同學年少曰「我無福、亦無大罪、死乃當作清溪廟神。諸君行便、可過看之。」既死後、諸年少道人詣其廟。既至、便靈語相勞問、聲音如昔時。臨去云「久不聞唄聲、思一聞之。」其伴慧觀、便爲作唄訖、其神猶唱讚。語云「岐路之訣、尚有悽愴。況此之乖、形神分散。窈冥之歎、情何可

言。」既而歎歎不自勝、諸道人等皆爲流涕。

晉の太康中、謝家の沙門竺曇遂あり。年は二十餘、白晢端正なり。流俗の沙門となり、長行し、清溪廟の前を經て過り、因りて廟中に入りて看る。暮れに歸るに、夢に一婦人來り、語りて云ふ「君は當に來りて我が廟中の神と作るべし。復た久しからず」と。曇は遂りて夢に問ふ「婦人は是れ誰なるか」と。婦人云ふ「我は是れ清溪廟中の姑なり」と。此くの如くして一月許り、便ち病む。死に臨み、同に學ぶ年少に謂ひて曰く「我に福無く、亦た大罪無ければ、死して乃ち當に清溪廟の神と作るべし。諸君行き、便あらば、過りて之を看るべし」と。既に死するの後、諸の年少の道人、其の廟に詣る。既に至るや、便ち靈語ありて相ひ勞問するに、聲音は昔時の如し。去るに臨みて云ふ「久しく唄聲を聞かざれば、一たび之を聞かんことを思ふ」と。其の伴慧觀、便ち爲に唄を作し訖るに、其の神は猶ほ讚を唱ふ。語りて云ふ「岐路の訣れすら、尚ほ悽愴たる有り。況や此の乖れ、形神の分散するをや。窈冥の歎き、情何をか言ふべき」と。既にして歎歎して自ら勝へず、諸の道人等は皆な爲に流涕す。

この話の「竺曇遂」は、清溪の女神に召されて神となつている。

「人間」が神となった経緯については以上のような例があるが、「廟」が本来、祖先の霊を祀る建物を指すものであった為か、亡くなった人物が祀られているという資料が多くを占める。4の「子英廟」にしても、「仙界に入つて神仙となる」という経緯があり、生きた人間がそのまま廟神になったという例は見られない。

それでは、「その他」の動植物などを前身とする廟神は、どのような経緯で祀られるに至つたのだろうか。②—Aの「高山君」、②—Bの「樹神黄祖」、②—Cの「石侯祠」に記される廟神は、「病氣を治す」「雲や雨を呼ぶ」等といった不思議な力を示すことによつて神として祀られている。そういった要素は人間の廟神の説話にも見られるが、動植物の廟神の説話は、人間の廟神の説話のように「死」という要素を必要としていない。その代わりとなる要素については、元となる考え方として、以下に挙げるような「氣の変化」がある。

「五氣變化」(『搜神記』卷十二)

天有五氣、萬物化成。木清則仁、火清則禮、金清則義、水清則智、土清則思。五氣盡純、聖德備也。木濁則弱、火濁則淫、金濁則暴、水濁則貪、土濁則頑。五氣盡濁、民之下也。中土多聖人、和氣所交也。絕域多怪物、異氣所産也。(略)千歳之雉、入海爲蟹、百年之雀、入海爲蛤。千歳龜鼈、能與人語。千歳之

狐、起爲美女。千歳之蛇、斷而復續。百年之鼠、而能相卜。數之至也。(略)尙鐵其方、則爲妖管。故下體生于上、上體生于下、氣之反者也。人生獸、獸生人、氣之亂者也。男化爲女、女化爲男、氣之質者也。魯牛哀得疾、七日化而爲虎。

はじめの波線部分に「天に五氣有り、萬物化成す」とあり、つまり万物は天の「五氣」から成るといふ。後半には「中土に聖人の多きは、和氣の交はる所なればなり。絶域に怪物の多きは、異氣の産する所なればなり」また「千歳ちとせの雉は、海に入りて蟹と爲る。百年の雀は、海に入りて蛤と爲る。千歳ちとせの龜鼈は、能く人と語る。千歳ちとせの狐は、起ちて美女と爲る。千歳ちとせの蛇は、斷つも復た續く。百年の鼠は、而して能く相ひ卜す。數かずの至りなり」とある。つまり、氣によつてそのものの特質は定められ、歲月を経ることで変化するという。同様の記述が『玄中記』にも見える。

千歳樹精爲青羊、萬歳樹精爲牛、多出遊人間。

千歳の樹精は青羊と爲り、萬歳の樹精は牛と爲り、多く出でて人間に遊ぶ。(『珠林』三七引)

狐五十歳、能變化爲婦人。百歳爲美女、爲神巫。或爲丈夫、與女人交接。能知千里外事。善蠱魅、使人

迷惑失智。千歲即與天通。爲天狐。

狐は五十歳にして、能く變化して婦人と爲る。百歳にして美女と爲り、神巫と爲る。或いは丈夫と爲り、女人と交接す。能く千里の外の事を知る。蠱魅を善くし、人をして迷惑して智を失はしむ。千歳にして即ち天と通じ、天狐と爲る。〔廣記〕四四七引

百歳鼠化爲神。

百歳の鼠は化して神と爲る。〔御覽〕九一一引

これらの記述をみると、歳月を経た動植物は人間に化け、人間の言葉話し、不思議な力を身につけて「妖怪」となり、最終的には「神」にもなれるという考え方があったことが分かる。つまり「妖怪」とは、動植物が「神」となる前の段階であるとも言えるのだが、その様な「昇格」ではない例もある。「妖怪」〔搜神記〕卷六に「妖怪者、蓋精氣之依物者也」(妖怪は、蓋し精氣の物に依る者なり)と、また「五酉」〔搜神記〕卷十九に「物老則羣精依之。(略)夫六畜之物、及龜、蛇、魚、鱉、草、木之屬、久者神皆憑依、能爲妖怪」(物老ゆれば則ち羣精之に依る。(略)夫の六畜の物、及び龜、蛇、魚、鱉、草、木の屬ひ、久しき者は神皆な憑依し、能く妖怪を爲す)とあるように、他の氣が取り憑いて変化する場合

もあると考えられていたようである。

氣の變化による妖怪化と人格化については、志怪の中にも記述が見える。以下に例を挙げておく。

「放伯裘」〔搜神後記〕卷九

魅曰、我本千歲狐也。今變爲魅、垂化爲神。

魅曰く、我本は千歳の狐なり。今變じて魅と爲り、垂て化して神と爲らんとす。

「張華」〔搜神記〕卷十八

張華字茂先、晉惠帝時爲司空。於時燕昭王墓前、有一斑狐。積年能爲變幻。乃變作一書生、欲詣張公。

(略)華聞益怒曰「此必眞妖也。聞、魑魅忌狗、所別者數百年物耳。千年老精、不能復別。惟得千年枯木照之、則形立見。」孔章曰「千年神木、何由可得。」華曰「世傳燕昭王墓前華表木、已經千年。」

張華字は茂先、晉の惠帝の時司空と爲る。時に於て燕の昭王の墓前に、一斑狐有り。年を積みて能く變幻を爲す。乃ち變じて一書生と作り、張公に詣らんと欲す。(略)華は聞きて益す怒りて曰く「此れ必ず眞妖ならん。聞く、魑魅、狗を忌むも、別つ所の者は數百年の物なるのみ。千年の老精、復た別つ能はず。惟だ千年の枯木を得て之を照らせば、則

ち形立ちどころに見ると」と。孔章曰く「千年の樹木、何に由りて得べきか」と。華曰く「世に傳ふ、燕の昭王の墓前の華表の木、已に千年を経たり」と。

「怒特祠」(「搜神記」卷十八)

秦時、武都故道有怒特祠。祠上生梓樹。秦文公二十七年、使人伐之。輒有大風雨。樹創隨合。經日不斷。文公乃益發卒、持斧者至四十人、猶不斷。士疲還息。其一人傷足、不能行。臥樹下。聞鬼語樹神、曰「勞乎攻戰。」其一人曰「何足爲勞。」又曰「秦公將必不休、如之何。」答曰「秦公其知予何。」又曰「秦若使三百人被髮以朱絲繞樹、赭衣灰塗汝、汝得不困耶。」神寂無言。明日、病人語所聞。公於是令人皆衣赭、隨斫創。全以灰。樹斷、中有一青牛出、走入豐水中。其後、青牛出豐水中。使騎擊之不勝。有騎、墮地復上、髻解被髮。牛畏之、乃入水不敢出。故秦自是置旄頭騎。

秦の時、武都の故道に怒特祠有り。祠上に梓樹を生ず。秦の文公の二十七年、人をして之を伐らしむるや、輒ち大風雨有り。樹の創隨ひ合し。日を経るも斷たれず。文公乃ち益す卒を發し、斧を持する者四十人に至るも、猶ほ斷たれず。士は疲れ還りて息む。其の一人足を傷つけ、行くこと能はず。樹下に臥す。鬼の樹神に語るを聞くに、曰く「攻

戰に勞るるか」と。其の一人曰く「何ぞ勞ると爲すに足らん」と。又曰く「秦公將に必ず休めざらん、之を如何せん」と。答へて曰く「秦公其れ予を如何せん」と。又曰く「秦若し三百人をして髮を被り朱絲を以て樹に繞らし、赭衣灰塗して汝を伐らしむれば、汝困しまざるを得んや」と。神寂として言無し。明日、病む人聞く所を語る。公是に於て人をして皆な赭を衣せ、斫創に隨ひ、塗るに灰を以てせしむ。樹斷たれ、中より一青牛の出づる有り、走りて豐水中に入る。其の後、青牛、豐水中より出づ。騎をして之を撃たしむるも勝たず。騎有り、地に墮ちて復た上り、髻解けて髮を被る。牛之を畏れ、乃ち水に入りて敢へて出でず。故に秦是れより旄頭騎を置く。

「放伯裘」では、千年を経た狐が妖怪から神となろうとしており、「張華」では、人に化けた千年の狐が、千年の神木を燃してつけた火に照らされて正体を現している。「怒特祠」では、祠の上の梓の木を伐ると、中から黒い牛が出て来るのだが、この要素は『珠林』三七引『玄中記』の「萬歳の樹精は牛と爲る」という記述に対応している。つまり、動植物を前身とする廟神は、人間を前身とするものとは異なり、歳月を経ることにより変化したものと考えられる。

以上のように、志怪における廟神は、その前身が人間

であるか否かということによつて、誕生する経緯の記述に違いが見られる。他に挙げられる差異としては、前身を動物とする廟神が、最終的に「退治」されるということがある。妖怪退治譚の「妖怪」と同様に扱われるというのである。前身が何であれ、「神」には違いない筈だが、やはり人間を上等とし、動物を下等とする考え方に拠るのであるうか。先の「五氣變化」は、「其の方を錯れば、則ち妖宵と爲る」つまり「道を誤ると、異端のものとなる」とし、続いて「氣の逆転」「氣の乱れ」等について述べた上で、人が虎に変化した例を挙げ、人間が動物に変化することは「錯り」であるとす。しかし、動物が人間に化けるのは「數の至り」、つまり「歲月を経たものがそれぞれの變化の極致に至つたもの」として、長く生きることによつて格が上がつたものとする。これらの記述は、万物を構成する「氣」という根本的な部分で、動物が人間よりも下等な存在として扱われていることを意味している。そういった考え方が、人間や動物などが神という存在に至つてもなお影響しているのである。

人間よりも動物などを下等とする考え方は、無論中国に限つたことではないが、例えば日本はどうであろうか。中国のそれと全く同様であると言えるのだろうか。

次に述べることは、まだ予想の段階に過ぎないものではあるが、参考として挙げてみたい。

#### 「女化蠶」(『搜神記』卷十四)

舊説。太古之時、有大人遠征、家無餘人、唯有一女。牡馬一匹、女親養之。窮居幽處、思念其父、乃戲馬曰「爾能爲我迎得父還、吾將嫁汝。」馬既承此言、乃絕韁而去、徑至父所。父見馬驚喜、因取而乘之。馬望所自來、悲鳴不已。父曰「此馬無事如此、我家得無有故乎。」亟乘以歸。爲畜生有非常之情、故厚加芻養。馬不肯食。每見女出入、輒喜奮怒擊。如此非一、父怪之、密以問女。女具以告父、必爲是故。父曰「勿言、恐辱家門。且莫出入。」於是伏弩射殺之、暴皮于庭。父行、女與鄰女、於皮所戲、以足蹙之曰「汝是畜生、而欲取人爲婦耶。招此屠剥、如何自苦。」言未及竟、馬皮蹶然而起、卷女以行。鄰女忙怕、不敢救之。走告其父。父還求索、已出失之。後、經數日、得於大樹枝間、女及馬皮。盡化爲蠶、而績於樹上。其蠶綸理厚大、異於常蠶。鄰婦取而養之、其收數倍。因名其樹曰「桑」。桑者喪也。由斯百姓競種之。今世所養是也。

養蚕の始まりについて記された「女化蠶」は、「あるところ」にひとりの娘がいたが、遠方に出掛けた父親が恋しくなり、飼っていた馬に「お父さんを連れて帰ってくれたら、お前の妻になりましょう」と話しかけた。果たして馬は父親を連れ帰り、娘の姿を見ると、催促するかのよう暴れたのだが、事情を知つた父親が馬を殺してし

まう。馬の皮は庭にさらされ、娘はその皮を「動物のくせに人間を妻にほしがるなんて」と足で蹴りつける。すると馬の皮が娘を巻き込んで何処かへ行ってしまい、見つけた時には蚕に姿を変えてしまっていた」という話である。この話は日本にも伝わり、特に東北地方の蚕・農業の神であるオシラサマへの信仰と結びついて広まっている。

昔ある處に貧しき百姓あり。妻は無くて美しき娘あり。又一匹の馬を養ふ。娘は此の馬を愛して夜になれば厩舎に行きて寝ね終に馬と夫婦になれり。或る夜、父は此の事を知りて、其の次の日に娘には知らせず、馬を連れ出して桑の木につり下げて殺したり。その夜、娘は馬の居らぬより父に尋ねて此の事を知り、驚き悲しみて桑の木の下に行き、死したる馬の首に縋りて泣きみたりしを、父は之を悪みて斧を以て後より馬の首を切り落とせしに、忽ち娘は其の首に乗りたるまま天に昇り去れり。オシラサマと云ふは此の時より成りたる神なり。馬をつり下げたる桑の枝にて其の神の像を作る。

(柳田国男『遠野物語』)

この話の大筋は「女化蠶」と似ているが、その中には大きな違いも見られる。波線部分に明らかなように、此方には娘の恋愛感情の要素が加えられているということである。

ある。

この両話については様々な論がある。恋愛要素の付加についても、社会背景の事情の違いであったり、六朝志怪が文人の手によつて編集されたものであると、オシラサマ伝説は巫女によつて伝えられたものであるという経緯も理由として充分かとも思われるのだが、中国と日本とでは、動物に対する感覚に違いがあるのであるのではないかと考えている。つまり、日本では古来、人間と動植物の距離が近く、境界がゆるやかであったことが関係しているのではないかと、ということである。

この点について述べるにはもつと多くの資料収集が必要となる。今後はこのような視点からも考察していきたい。

### 三 結び

六朝期に民間で多く建てられた祠や廟について、乱世に生きた人々が心の拠り所を求めた結果であることについて既に述べた。また、志怪説話集は『隋書』経籍志の雑傳類に入れられており、六朝においては記録としての性質を持っていたと考えられる。しかし志怪に記される廟神は、全てが純粹な信仰の対象として扱われている訳ではない。

そのことについて、以下の話を挙げておく。

「鱸父廟」(『異苑』巻五)



會稽石亭球有大楓樹、其中空朽、每雨水輒滿溢。有估客載生鱸至此、聊放一頭於朽樹中、以爲狡獪。村民見之、以魚鱸非樹中之物、咸謂是神。乃依樹起屋、宰牲祭祀、未嘗虛日。因遂名「鱸父廟」。人有祈請及穢慢、則禍福立至。後估客返、見其如此、即取作臠。於是遂絕。

この話の内容は、「會稽せきの石亭球せいていきゅうに大きな楓の木があった。ある商人が悪戯をして、その木の空洞にあつた水たまりにウナギを入れておいた。村人たちは木の中のウナギを神だと思ひ込み、『鱸父廟』と名づけて祀つた。加護を願えば福が訪れ、無礼があれば禍が起こつた。その後商人が帰つて来て、ウナギをスープにして食べてしまつた」というものである。

「張助」〔『搜神記』卷五〕

南頓張助、於田中種禾。見李核、欲持去。顧見空桑中有土。因植種、以餘漿溉灌。後人見桑中反復生李、轉相告語。有病目痛者、息陰下、言「李君、令我目愈、謝以一豚。」目痛小疾、亦行自愈。衆犬吠聲、盲者得視、遠近翕赫。其下車騎常數千百、酒肉滂沱。間一歲餘、張助遠出來還、見之驚云「此有何神、乃我所種耳。」因就斫之。

この話の内容は、「張助という人が、すももの種を桑の

木のうろの中に植えた。目を患つた人がこの木に治るよう祈つたところ、暫くして自然に治つた。噂が広まり、目の不自由な人々が視覚を取り戻していった。この木の下には、車馬や供え物が溢れる程になつた。一年余り経ち、旅から帰つた張助が『私が植えただけの木が何の神だということか』と言つて木を切り倒してしまつた」というものである。

この二つの話は、何れも信仰される原因となつた「怪異」の種明かしをし、その元を断つという結末を迎える。ウナギの話に至つては、商人の悪戯であることが明確に示されており、迷信として笑い話にすらされている。当時の廟神は、ただ闇雲に信仰されていたという訳ではなく、冷静な見方もされていたようである。

以上、六朝志怪における廟神の前身から誕生の経緯、その扱われ方について述べた。しかし、廟神についての話は、「志怪」だけでなく、北魏、酈道元の『水経注』にも多くの記載が見られる。そこには中国全土の河川の流域に沿つて、各地の地理、産物、風俗、伝承などが記されており、これによつて、廟神の種類や各地における存在状況などの補足もできると考えている。その他、今後「廟神と仏教の關係」「唐代小説における廟神」等の問題についても取り組む予定である。